

# 保育者をめざす学生のもつ 動植物に対するイメージに関する研究Ⅲ

A Study on the Various Merits and Demerits in Caring for Plants and Animals  
at Nursery School or Kindergerten Ⅲ

おかもとみわこ 高橋弥生 糸井志津乃 相澤久徳  
(Miwako OKAMOTO Yayoi TAKAHASHI  
Shizuno ITOI Hisanori AIZAWA)

## I. はじめに

我々は、平成18年より短期大学部子ども学科生を対象に動植物の絵を描かせる調査を開始した。1年目は、飼育・栽培の当番活動を2年間経験した学生の絵でも、漫画的であったり、特徴を曖昧にしていたりする絵が多いことが分かった。2年目には、入学したばかりで飼育・栽培の当番活動をしていない人間学部子ども学科の1年生を対象に、できるだけリアルに表現するように指示をした上で絵を描かせると同時に、これまでの飼育・栽培の経験や子どもの頃の遊び体験を調査し、それらと絵の関連があるかどうかを調べた。その結果、学生の描いた絵と、これまでの飼育・栽培経験や子どもの頃の遊び体験がさほど影響し合っていないように推測されたのである。

今回の調査は、昨年と同様に飼育・栽培の当番活動をほとんど経験していない子ども学科1年生と看護学部1年生を対象として、動植物の絵をリアルに描かせ、両学科生に差があるかどうか調べてみた。また、両学科生ともに、飼育や栽培の経験や子どもの頃の遊び体験について調べ、絵との関連があるかどうかを考察した。1960年代から1970年代にかけての高度経済成長から始まり、1980年代からのバブル期、1990年代のバブル崩壊へと日々社会情勢がめまぐるしく変化する現代において、近頃ではゆとり教育が招いたとされる学力低下が問題とされ始めている。今回調査対象となった学生は、1989年から90年生まれが多く、小学校からまさにそのゆとり教育を受けてきた学生たちである。

## II. 研究の概要

### 1. 目的

学科により学生の描く動植物の絵に差が生じるか、また飼育栽培の経験や子どもの頃の遊び体験に差があるのか調査、分析を行う。それにより、現代の学生の持つ動植物に対するイメージがどのようなものであるか、そのイメージが今後の学生の進路に影響を与えるのかなど考察を加える。さらに、学生がこれまでに受けてきた学校教育や美術教育の中で欠如している部分があるのか、あるとしたら大学教育の中でどのようにその点を育てていくかについて考察す

る。

## 2. 研究方法

1) 子ども学科1年生150名と看護学科1年生90名、合計240名を対象にアンケート調査を行う。アンケートの内容は、幼稚園・保育所、小学校、中学校、高校、自宅での飼育・栽培に関する経験、および子どもの頃の遊び体験に関してである。

2) 動植物の絵を、鉛筆で描く。その際、できるだけリアルに描くように指示をする。また、判定基準を設けて、絵の正誤を判定する。(所要時間30分)

子ども学科・・・動物3種(ウサギ、ウコッケイ、ザリガニ)

植物3種(イナホ、サツマイモ、チューリップ)

看護学科・・・動物1種(ニワトリ)

植物2種(イナホ、チューリップ)

### 【判定基準】

ウサギ・・・ 4本足、ひげ、口のかたち

ウコッケイ(ニワトリ)・・・2本足、とさか、くちばし

ザリガニ・・・ はさみ、はさみ以外の足、頭部と尾部

イナホ・・・ 米粒状の実、実の付き方

サツマイモ・・・ 形、凸凹したかんじ

チューリップ・・・花びらの形

## 3. 期間

子ども学科 2008年5月

看護学科 2008年7月

## 4. 調査対象

目白大学人間学部子ども学科1年生 150名

目白大学看護学部看護学科1年生 90名

## Ⅲ. 看護学科生との比較

看護学科に入学した1年生を対象に、子ども学科で行ったものと同様のアンケート調査を行った。また、イラストに関しては、チューリップ、イナホ、ニワトリ(子ども学科のウコッケイと比較)の3種を描いてもらい、子ども学科生のものと比較を試みた。

子ども学科生と看護学科生には、女子が8割以上であること、人と関わる職業を目指していること、といった共通点が見られる。しかし子ども学科では動植物が身近にあり、カリキュラムの中にも動植物と関わる授業がある。また、保育現場では動植物と触れ合う機会も多い。子

ども学科に入学してくる学生は、動植物や自然に対し、多少関心を持っているのかもしれないと予測して調査を試みた。このような違いがイラストやアンケートに影響するのであろうか。

## 1. 飼育経験の比較

表1はこれまでの飼育経験を比較したものである。この結果からは、看護学科生の方の飼育経験が全体的にやや多いことが分かる。特に家庭での飼育経験に関しては、図1に示した。これによると、家庭で多く飼育されている動物の種類は看護学科生も子ども学科生も同じであるが、犬、虫、ハムスターなどは看護学科生の方が飼育経験が少し高くなっている。ただ、看護学科生も子ども学科生も、中学と高校での飼育経験がほとんどないことは共通している。この状況は昨年我々が子ども学科生を対象に調査した時と同様であった。<sup>1)</sup> 幼稚園・保育所、小学校までは、ウサギやニワトリを多くの学生が飼育している。しかし中学以降はそれらの動物と身近に接する機会が失われてしまうのである。間違ったイメージがそのまま固定してしまう、またはアニメーションのようなイメージでしか動物の形をイメージできない原因の一つがここにあるのではないだろうか。

表1 飼育経験 (%)

	幼稚園・保育所		小学校		中学校		高校		家庭	
	看護学科	子ども学科	看護学科	子ども学科	看護学科	子ども学科	看護学科	子ども学科	看護学科	子ども学科
犬	1.05	2.80	0	2.80	2.11	0.70	2.11	2.10	50.53	32.17
ねこ	1.05	0	0	1.40	1.05	0.70	2.11	2.10	16.32	13.99
ニワトリ類	25.26	27.27	67.37	72.73	3.16	0	0	1.40	6.32	2.80
うさぎ	34.74	43.36	81.05	83.92	0	0.70	0	1.40	15.79	8.39
あひる	6.32	5.59	8.42	7.69	0	0.70	1.05	0	1.05	0
クジャク	5.26	6.29	3.16	4.20	0	0.70	0	0	0	0
小鳥	7.37	20.98	11.58	25.87	0	2.10	2.11	0.70	16.84	17.48
ハムスター	2.11	12.59	22.11	28.67	4.21	1.40	3.16	1.40	40.00	31.47
金魚	17.89	29.37	45.26	48.95	15.79	10.49	6.32	2.80	73.68	68.53
ザリガニ	9.47	21.68	30.53	39.16	1.05	2.10	1.05	0.70	32.63	32.87
虫	12.63	22.38	32.63	32.17	2.11	1.40	1.05	1.40	46.32	34.97
ヤギ	5.26	1.40	2.11	0.70	0	0	0	0	0	0.70
カメ	8.42	18.18	18.95	29.37	5.26	4.20	5.26	2.10	26.32	27.97
モルモット	5.26	13.29	4.21	6.29	0	0	0	0	2.11	3.50
メダカ	7.37	13.99	54.74	53.15	17.89	9.09	1.05	4.20	26.32	28.67
カエル	3.16	4.90	8.48	16.78	0	2.10	1.05	0	14.74	9.09

## 2. 栽培経験の比較

図2は、看護学科生と子ども学科生の栽培経験を比較したものである。これによると、看護学科生の方がかなり栽培経験が多いことがわかる。その理由として考えられるのは、看護学科

図1 家庭での飼育経験の比較

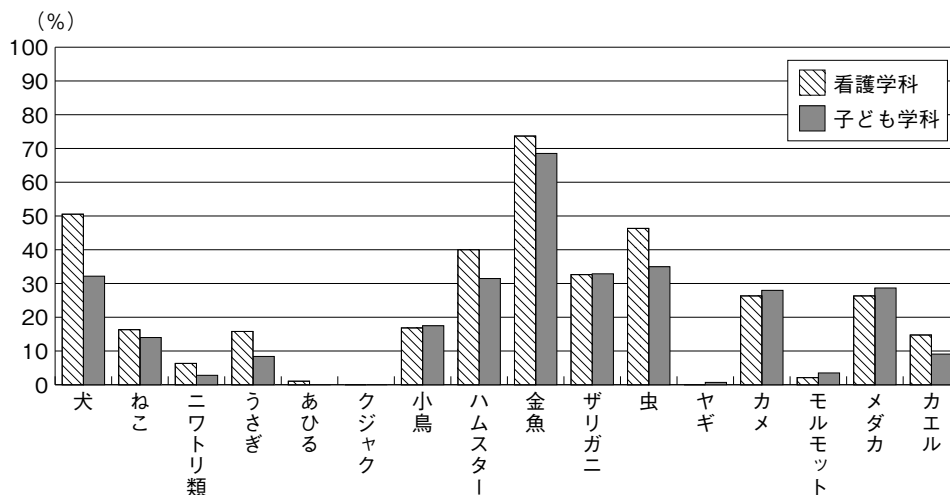
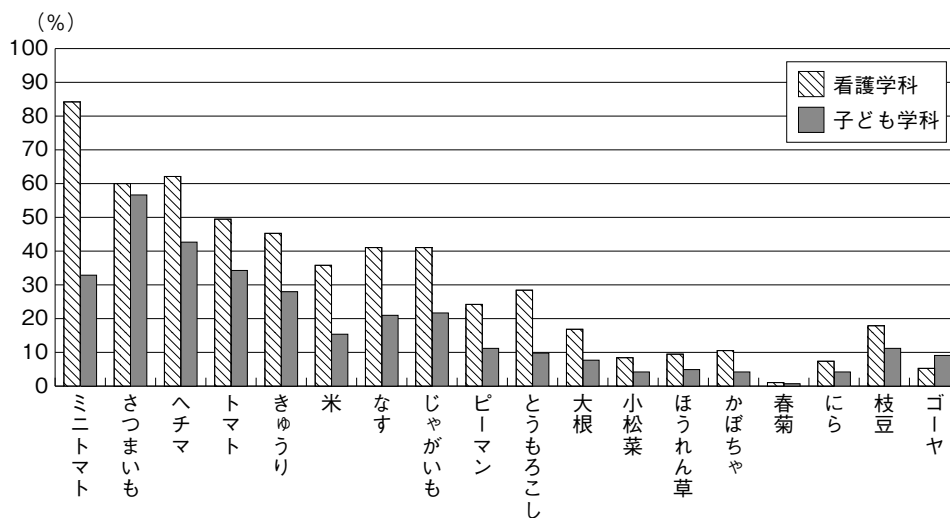


図2 栽培経験の比較



生の出身地域の多くが都心以外であることであろう。東京都出身は約1割ほどである。子ども学科生の場合、半数ほどが東京都出身であることから、このような差が生じているのではないだろうか。

### 3. 子どもの頃の体験の比較

これも前項と同様の理由と考えられるが、看護学科生の方が体験者の比率がほとんどの項目で高かった。図3・4は両学科生の子どもの頃の体験を示したものである。これを見ると、草にかぶれる、花の蜜を吸う、草笛・笹舟作り、などのように周囲の環境に左右され易い項目に

図3 子どものころの体験比較①

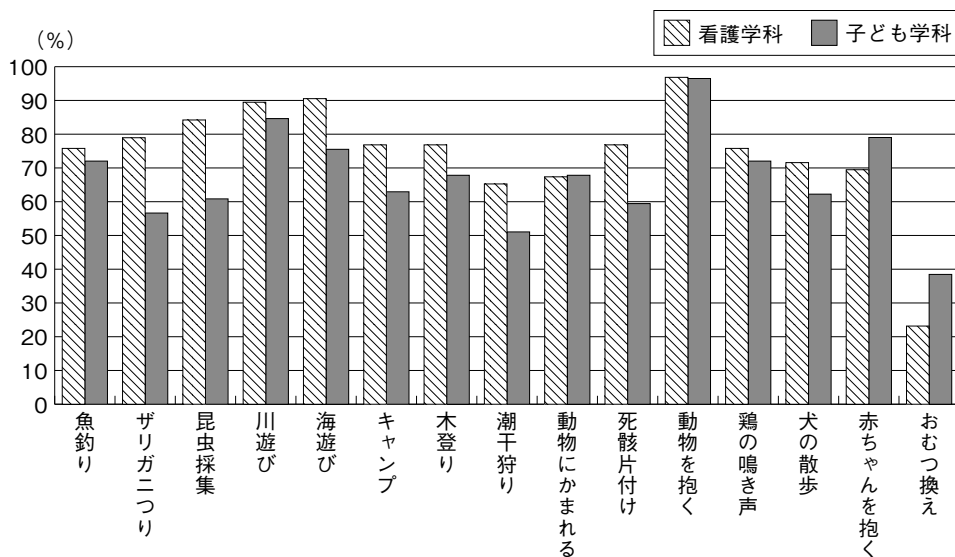
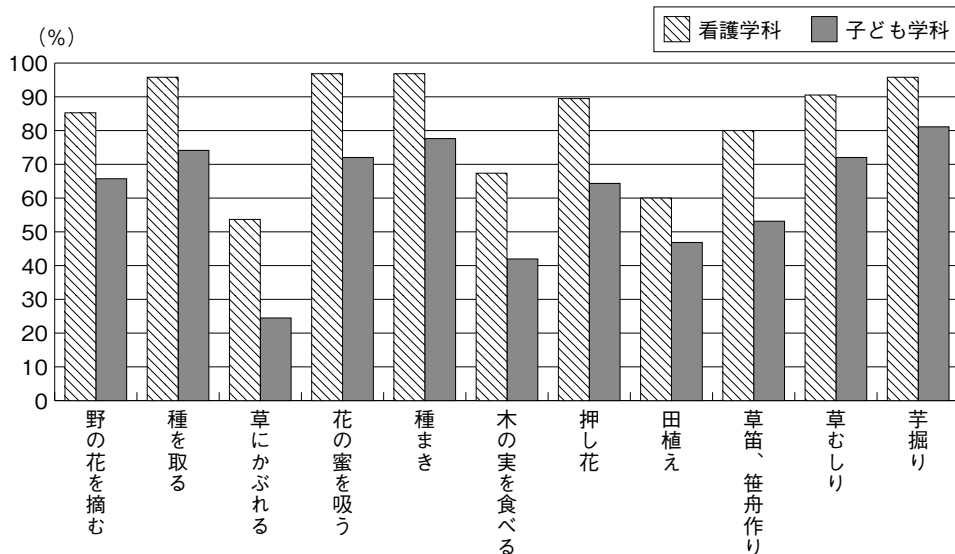


図4 子どものころの体験比較②



関してその差が大きく出ているようである。

1. 2. 3の結果を見ると、飼育・栽培の経験や子どもの頃の体験は、学科選択や職業選択の動機にはなっていないようである。あくまでも受動的な環境としてこれらの経験や体験があったということであろう。

#### 4. イラスト正答率の比較

イラストについては、チューリップ、イナホ、ニワトリ（ウコッケイ）の3種の比較を試み

た。図5は両学科生の正答率を示している。チューリップとニワトリについては両学科ともに70%以上になっている。特に子ども学科生のニワトリは90%と高い正答率である。前掲の表1を見ると、ニワトリ類の飼育経験割合が最も高いのは、子ども学科生の小学校時代で、72.73%であるので、イラストの正答率の90%となったことにも影響していると思われる。米の栽培経験については、看護学科生35.79%、子ども学科生15.38%である。いなほのイラストの正答率は看護学科生27.78%、子ども学科生23.33%であった。多少の差はあるが、やはり栽培経験に影響されていると考えられる正答率になっているようである。チューリップについては、春になると学校を始め、様々な場所で見かける機会がある。今回調査ではチューリップの栽培経験は調べていないが、非常に身近な花であることは間違いない。正答率の高さはそのためであろう。飼育栽培の経験率が高い方がイラストの正答率が高く、経験率が低いと正答率も低い。つまり、経験と絵には関連があるということである。ただ、看護学科生と子ども学科生のイラスト正答率にはほとんど差が見られなかった。

看護学科生は、気質として世話をすることが好きな学生が多い。環境だけでなく、そのことも飼育や栽培の経験率を高めている一因になっているだろう。しかしイラストの正答率には、両学科でさほど差が出なかった。生活環境に多少自然が多い、または飼育経験が少し多い、という程度では学科によるイラスト正答率の差は生じなかったといえる。

#### IV. 子ども学科生のイラスト正答率と経験の比較

子ども学科生には今回6種類のイラストを描いてもらっている。そのイラストの正答率と、飼育・栽培の経験率とを比較したのが図6である。チューリップの栽培経験は質問していなかったため、イラストの正答率のみ示している。これを見ると、ウサギ以外は飼育・栽培の経験がイラストの正答率に影響を与えていることが伺える。なぜなら、栽培経

図5 イラスト正答率比較

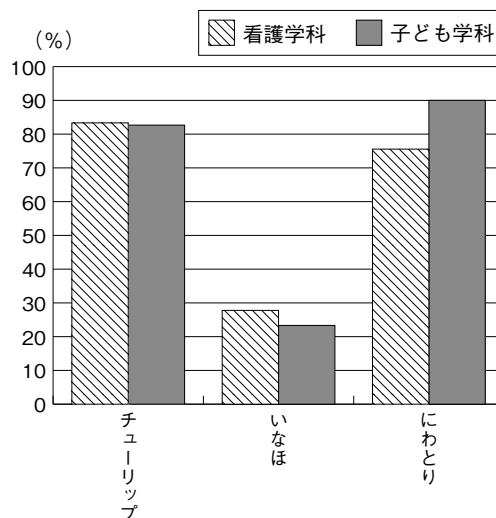
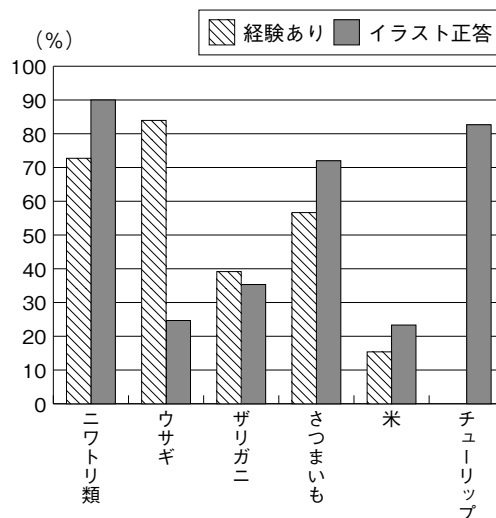


図6 経験とイラスト正答率の比較



験が低い米は、イナホのイラスト正答率も低い。また、飼育経験の低いザリガニのイラスト正答率も低くなっているのである。ただしウサギだけはこれに当てはまらず、飼育経験が非常に高いにも関わらずイラストの正答率が大変低くなっている。なぜなら、リアルに描くように指示しても、ウサギのイラストは口が正しく描けていない場合が非常に多かったからである。アニメーションの影響を強く受けていることは否めないだろう。

さらに、これまでも報告してきたように、イラストの誤答の中にはそれぞれの動植物の特徴を全く捉えられていないものが目を引く。これは経験だけが原因ではなく、学校における教科教育や大人のかかわり方などに大きな原因が隠されているようにも感じられるのである。

## V. 美術教育の観点から

### 1. 観察力のないイメージ表現への影響について

子どもの想像力は極めて鮮明であり、多くの事例においてそれは直観像ではないかと言われている。子どもは誕生の瞬間から自分自身を表現し始める。しかし子どもが成長してゆくにつれて、想像力の強さと個性を失い、概念という思考が働きかけてくる。子どもの想像力は五感を通して養うことができる。そしてまた、直接的に見る色の体験や描画を通して想像力を養う。しかし現代社会は、自然と直接的体験が足りないといわれている。これでは感性豊かな想像力が育たないのではないだろうか。直接体験を通して、想像性豊かな子どもを育てたい。子どもは豊かな感性を持って生まれてくる。その感性をさらに豊かに育てることは豊かな想像力を育てることになるのである。

大学入学後の比較的早い時期での調査であるために、子ども学科の学生と看護学科の学生の各モチーフに対しての表現イメージにそれほど大きな差は出てこなかった。しかし、全体的に提出されたそれぞれの作品では、学生本人の観察力、表現力の低下を感じるものとなった。アニメのイラストを描くといった経験はだれにもあると思われるが、リアルに対象をとらえ実際にしっかりと表現するということには経験の無さなのか、幼児期に描いたことのある絵をそのまま描くというような、稚拙で単純な表現で学生本人が納得してしまっているような感じを受けるものが多かった。誰もが幼児期には対象に興味を持ち特徴をとらえ楽しんで表現しようとしていたものが、成長期のある段階からそのような表現活動をしなくなってしまう。それは、図式期から写実期に変わってくると、そこに具体的な対象の表現から出てくる比較、「似ている、似ていない」という意味の無い評価、比較による苦手意識が出てきてしまうことによって起こってしまう影響であると考えられる。特に写実期に入ってから写実表現には個人的な成長の差、経験の差があるので、そこで描かれたものを比較することは、美術への興味や積極性を無くしてってしまう恐れがある。小学校高学年から高校生へとつながる表現活動の基本となるこの時期は、指導者としては気をつけなければならないだろう。

## 2. なぐり描きから図式期までの美術教育について

1歳頃から、肩と手が連動して動くようになり、点描を描き始める。つまり手の働きが生み出す「なぐり描き」である。「なぐり描き」については様々な表現が使われており、搔画や錯画またはスクリプルとも表現されている。

このなぐり描き期初期は、ひとり遊びのかたちで絵を描くという表現方法を学んでいく時期ということになる。なぐり描き期には上手下手は存在しない。手の感覚機能訓練でもあり、脳の発達段階に伴った表現でもある。月齢によって異なることがあるが、なぐり描き前期は万国共通で点描画から始まるのである。

2歳頃から手の働きによる造形遊びや、生活習慣による新たな運動機能が発達してくる。このころになると、手の機能の中でも特に指の発達機能による、「つまむ」という行為がでてくる。この機能を獲得することにより、感覚機能が同時に発達してくる。つまり、視覚、聴覚、嗅覚、触覚などの感覚機能も発達するのである。またこの頃から喃語を話すようになり、「ジージ、マーマ、パーパ、ブーブ」と命名しながら手を動かすことができ、○や縦線、横線を自由に表現できるようになる。

美術教育とは子どもの発達に応じて、子どもの絵を発見し、子どもの絵を育てることである。しかし現代社会は大人が子どもの絵と創造力と想像力をゆがめている。親の都合で、本来与えられなくてはいけない環境を提供できない場合が多々あるといえる。そして、一番の問題が大人の絵を教えたがる大人が増えているということだ。つまり花はこう描く、顔はこう描く、太陽はこう描く、と限定してしまい、子どもの本来持っている直感力や創造力そして観察力を遮断してしまうのである。

子どもが親や保育者に対して「描いて。」とせがむ光景をよく目にすることがある。このような場合、子どもの自主性を育てる大切さを理解しなければならない。幼児の絵は趣味ではなく、発達に必要な不可欠な労働の一形態なのである。

## 3. 図式期以降の美術教育について

この時期の美術教育としては、観察力をつける必要がある。表現するということに興味を持ち始め、表現に工夫を加えながら個性が出てくる時期でもある。またこの時期、いわゆる写実期になると身の周りの美術作品の情報にも敏感になり、大人になるための成長につながる背伸びをした表現をしたがるようにもなってくる。空間を意識した立体的な表現や形をしっかり捉えることで、まとまりのある絵の中にも空間的な広がりや表現された作品になってくる。この時期に最も大切なことは、興味を持ち表現する楽しみを感じ出した子どもたちに対しての接し方である。小学校高学年になってくると保護者も成績を気にし始め、また、他の児童と比較することから結果を求め過ぎてしまう傾向がある。大人としての言葉や行動、表現を子どもに求め比較するのではなく、一緒に成長していくという気持ちで関わっていくことが必要である。そうすることで子どもにも安心感を与えることができ、成長につながるのではないかと思



う。なかなか上手に表現が出来ない事に対して大人が言い訳を考え子どもに与えてしまうことは、表現出来ないことに逃げ道を与えせっかく興味を示し伸びようとしている子どもの感性や個性を諦めさせてしまうことである。このように家庭、あるいは指導する側が悪影響を与えてしまうことによって、興味や観察力が育たずに、前序の学生の絵ような表現になってしまうのではないかと考えられる。子どもを取り巻く家庭環境や教育環境による表現に対しての影響の大きさによって、美術に対しての欲求ややる気、精神的な成長を含めた興味や向上心を無くしてしまうことにもつながる。その結果、写実期から完成期に絵で表現することへの苦手意識や図式期から成長のない表現となってしまうのではないだろうか。またゆとり教育以降、現在の学校の美術教育の中では、観察の中から形を捉え絵を描く事をせずに、イメージ表現や色彩表現だけの抽象画を描くような授業が多くなってきているので、対象をよく見て描くという、観察力の中から表現力をつけるという美術の表現活動ということがなされていない事も興味や観察力が育たないことと関係していると考えられる。しっかりとした形態観察というものは作品制作の基本となっていくものである。その観察力が育っていなければ、イメージ表現だけでは現しきれない今回のような課題に対して対応ができなくなってしまうのである。

興味を持ち対象にかかわることで物を感じ、絵を楽しんで描いていたと思われる図式期には、家庭環境の与える影響というものは大切である。その時期に、表現することに興味を持たせ楽しさを感じられる経験をする事で、その後の写実期の表現につながる観察力が身に付いてくるのではないだろうか。表現することに正解はないので、比較するのではなく、家庭の中で親も子どもと一緒に成長するというような考えで接することが大切である。生活の中で身近にある対象に対しても興味や注意力、観察力の欠如、あるいは関わることで知るという経験が無くなってしまい、表現したり人に何かを伝えたりすることが出来なくなっている学生の現状には大いに問題を感じるのである。

#### 4. 学生がイメージした絵についての考察

ウコッケイに関して問題としている、くちばし、とさか、足の数についての検証をする。ここで問題になる絵は、体の部分の形は鳥としてとらえているが、足の本数にまで観察ができていないのか、4本足になってしまっているものや、2本足ではあるがウコッケイには似てもいなく、ペンギン、あるいは特定のアニメキャラクターの影響か、鳥というイメージを自分の中で解決してしまっている、といった絵である。(イラスト1・2)



イラスト1



イラスト2

次にイナホについて考察をしてみるが、現代の学生には一番なじみの少ないモチーフになるのではないと思う。どんなものかもイメージできずに、白紙での提出も目立っていた。また、つくしのようになってしまったもの、あるいは柳のように見えてしまうもの、線に丸が付いているだけのとてもイナホとは言えないものになってしまっている。さらに、麦の穂のようにきれいに並んだものを描いた学生も多く、これはアルコール飲料などのコマーシャルに使われているイラストの影響もあるのではないかと考えられる。映像として、あるいは身近にあるもの、目にしているものを稲穂として間違えて記憶し、そのままイメージしてしまっているであろう。メディアの影響力の強さがうかがえる事例であると思う。植物個々の差というものは、生活の中で注意力を持って観察をしていなければなかなか分からないものも多く、これからの学生に対しての指導につなげていきたいところである。(イラスト3・4)

もう一つ気になる点は、画面の隅に太陽を描くということである。これは図式期にみられる描画の特徴的な傾向で、大学生のこの時期に描いてしまうということは、図式期後の表現経験の無さや観察力に対しての成長がみられないということである。写実期に入ってから空間的な絵画表現や絵に描かれる物の関係を、経験の中で理解できずにここまでできてしまっている。(イラスト5)

3点目のチューリップについては、幼児期から描いている一番ポピュラーな植物であると思われるが、問題となる基本的な花びらの形、重なりについての問題意識が無く、幼児期に描いていた絵、あるいは幼児期に使用したことのあるような教材の単純化されたイラストの絵をそのまま描いているような印象を強く受けるものが全体の中で多くなっている。ここに掲載したものは、それ以上にチューリップの特徴から離れた表現のものである。学生がイメージしてい



イラスト3

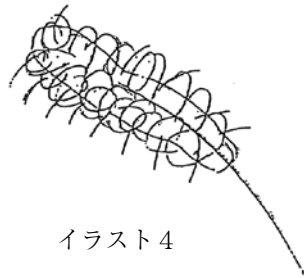


イラスト4



イラスト5



イラスト6

る花が何の花なのか分からないような花びらの形が全く違うもの、花の大きさと茎、葉の大きさのバランス関係が出来ていないものなど、花びらだけではなく葉の形や大きさなどについても特徴をとらえることが出来ていない。これは単に学生の表現力不足ということだけではない、日常生活の中での注意力、観察力が全く身につけていないということを示している。(イラスト6)

## 5. 四本足のニワトリたち

平成18年度より飼育栽培に直接関わる学生に、動植物の数種類をリアルに描くことを課題としてきた。四本足のニワトリを描く子どもがいることを話には聞いていたが、実際に目にしたのはこの調査を始めた時からである。

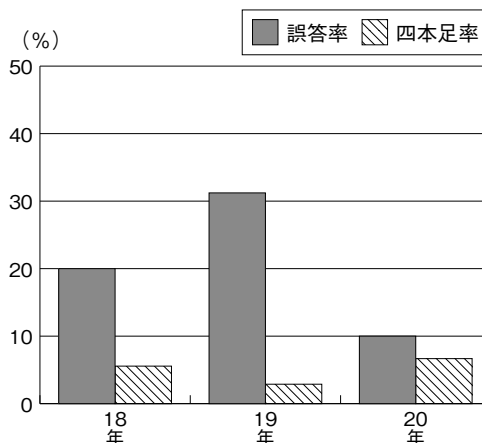
我々の調査では、四本足のニワトリは、平成18年度短期大学部生54名中3名(5.56%)、平成19年度学部1年生139名中4名(2.88%)、平成20年度においては、150名中10名(6.67%)が描いている。(図7)

今年の6.67%は過去2年を上回っている。実際にはありえないのに、堂々としっかりとした足を4本描いている。実際にニワトリと関わる経験はそう多くはないということは想像がつくが、提出された絵を見てみると、中には絵を描く力はあるのだが、常識的な事柄について考え違いをしてしまっていると思われる絵も目立つ。中には自信のない描き方をしている学生も確かにいて、一本の線で簡単に描いている学生もいるが、「動物の足は4本」という間違っただ先入観で、鳥の足も四本描いたものと思われる。実際に四本足を描いた学生に聞くと、『手がないから、足が四本だと思った』『動物は四本足でしょ』といった回答で、当たり前のような顔をしていたのである。つまり、自信を持って四本足のニワトリを描いたのである。

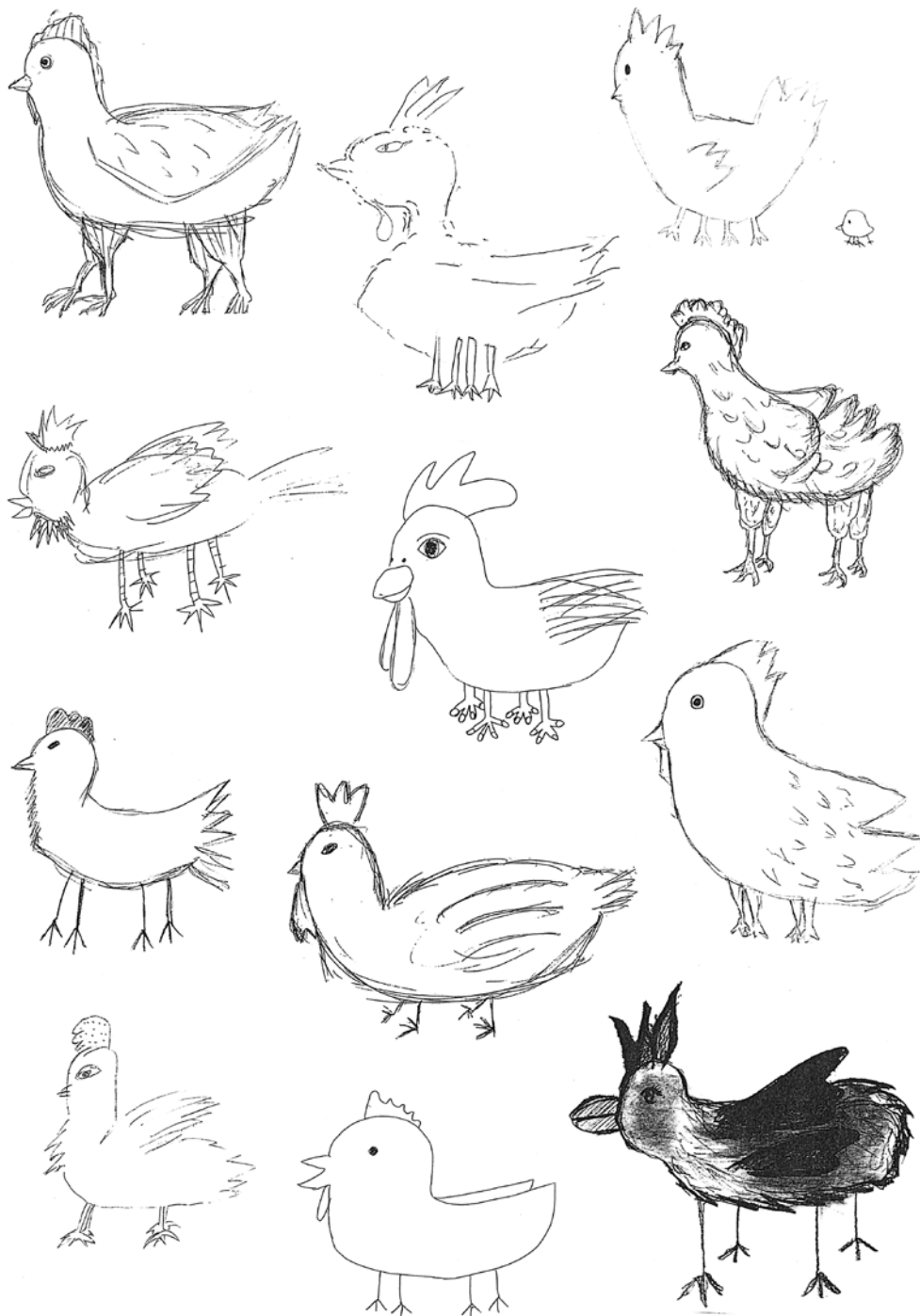
さらに、図7を見ると、誤答の中の四本足ニワトリが占める割合が高くなっていることも気になる点である。正しく描けていた学生に四本足の絵を見せても、ほとんどの学生はこちらが教えるまで四本足の間違いに気付かなかった。この様子では、さらに四本足を描く学生は増えるのではなかろうか。

今回調査した学生たちは1989～1990年生まれの子どもたちで、小学校からゆとり教育を受けてきている。観察力を重視しているはずの理科、生活、図画工作の教科においてどのような学習をしてきたのであろうか。観察する目が全く養われていない。ゆとり教育では、授業時数が減らしたことで様々な教科において削られた内容があった。図画工作については、自由な表現やイメージをふくらませ

図7 四本足のニワトリ出現率



四本足のニワトリたち



る、ということに力を入れたものの、じっくりと観察をして描くという時間は少なくなってしまったようである。また、授業内で観察を良く行う理科に関しては、1・2年生の科目からはなくなり、総合の時間とされた。そのため、低学年の段階で、じっくり観察をして描くという経験が減ってしまったのである。3年生以降は理科が始まり、その中で生物や植物の観察を行うようにはなってくる。中学校に入学すると、美術教育の中に「自然や身近なものを観察し、形や色彩の特徴や美しさなどをとらえスケッチすること。」と出てきて、観察、スケッチが始まるが、このころには美術に対する苦手意識があったり、受験科目ではないことから、あまり重要視しない傾向がある。

鳥の四本足に疑問を持たない学生たちがゆとり教育の中で育ってきているということは事実である。この結果には単に学生の注意力、観察力の低下というだけではなく、美術教育の中で色彩遊びやイメージ表現のみによる教育の先行、図式期から写実期という成長の段階における描画の経験不足など学習指導要領の改定に伴うゆとり教育の影響があると考えられる。

## VI. まとめ

幼児期では親とのかかわり合いの中から表現力や観察力が身に付いてくる。その成長段階の中で大切なことは、子どもの行っている表現に対して、親、あるいは大人の考えの押しつけではなく、子どもと一緒に成長していくという意識であると考えられる。そうすることで子どもの表現に対しての苦手意識を減らし、大人がしてしまう個人差を考えない比較という評価によって、意欲を失くしてしまうことが防げるのではないだろうか。簡単ではあるが、褒められることでやる気というものは何倍にも大きくなるものである。それにより表現に対する苦手意識を無くすことができれば、たとえそれほど上手にならなかったとしても、大学生になってまでも図式期の幼児の描いたような絵にはならないはずである。美術表現に対しての現代の学校教育では、観察を伴わないイメージ表現が多く、作品として形をしっかりと捉え表現することが行われていないために、表現に成長が見られないのである。

調査で行ったように、言葉を与えられ対象をイメージして描くということは、普段の生活の中での観察力というものが大切になってくる。看護学科生と子ども学科生の体験には多少の差があっても、どちらの学生も本当の意味での観察力が身に付いていないことはその絵から読み取れた。この観察力は、表面的な体験やイベント的な体験ではなく、もっと身近に、繰り返し体験することによって身に付く種類の力であると考えられる。

将来保育者として、成長途上の大切な時期である幼児の保育・教育に携わる学生に対して、学生自身の写実期、完成期の経験不足を補うためにも、造形表現の活動を中心に、様々な場面で感性を刺激し、個々の学生の表現力、観察力を高めていかなければならないと考える。

**【注】**

- 1) 高橋弥生 おかもとみわこ「保育者を目指す学生のもつ動植物に対するイメージに関する研究Ⅱ」  
目白大学短期大学部研究紀要 第44号 p127～140 2008年

**【参考文献】**

- ・ハーバード・リード著 「芸術による教育」 フィルムアート社 2001年
- ・鳥居昭美 「子どもの絵の見方、育て方」 大月書店 2003年
- ・幼稚園教育要領 平成10年告示
- ・小学校学習指導要領 平成10年告示
- ・中学校学習指導要領 平成10年告示